

# 「あすなろう農場」物語

飽託那天明村 佐藤 一誠 (農業 26歳)

野一面に、黄金色に美しく実った稲穂の中に、一直線に伸びたハイウェイ。昼間、あんなにせわしかった国道筋も、夜の訪れとともに平野特有の虫の音が、静かな夜の風物詩になる。

ときおり、モウーと鳴く牛の音が、心なしか大平の世を象徴しているかのようである。ここは熊本市の近郊農村、昭和五十三年の空想である。

ふと向こうから、ピカピカと光った田舎君の乗用車がスーッと音もなく停車した。この頃は、週二日の休みが、どの家庭でも徹底して、週末旅行の帰り道らしい。旅をすることが、人生最大の喜びと言う。

田舎君、一男二女の子供を連れて、殆んど毎週、旅に出かけているが、このところ、どこか観光地でも家族連れが目立って多くなった。田舎君の家は、整然と区画された水田の片隅に、団地化した宅地、素敵な住宅が建ち並ぶ。その中の一に、田舎君の生活の場がある。田舎君の職業は農業、押しも押されぬ成長産業の一つ、農業労働者の一員である。

ここで、波乱含みの今日に至る歩みを紹介してみよう。

あるとき、熊本県の為政者は、他にさきがけ、今後の農業の進むべき指針として、抜本的な改革を、モデ

最後に、協業体の組織が確立したゆえに実を結んだ副業の一つについて触れてみることにする。

あすなろう農場が軌道にのった昭和四十七年、田舎君は前々から考えていた養鶏を取り入れた。当初、資本金一〇〇万円を投じ一〇〇〇羽の産卵鶏から始めた。周囲に比べて抜群の能力は持ち合わせていなかったが一年三六五日を養鶏に専念することができ、普及所の適切な指導につれ、ほぼ計画通り年三〇羽の増羽を達成し、六年後の今日、成鶏五〇〇〇羽の養鶏場に成長した。機械の好きな田舎君、ここでも合理的に機械を導入。管理を夫婦と、二人の近所のパートタイムの奥さんを雇用し、生産物の販売は、流通機構の改善をはかり市内の小売店まで直接持ちこむ専門家の強さを發揮している。

以上のように、個人の得意な仕事を分業化して成果を修めたことは、広く周囲の意欲をも引出し、新しい農業の方向として認識されるとともに各地で協業化の芽が育ちつつあることは、新時代の農村にふさわしい道標になっていくことであろう。

歳末たすけあい運動に  
協力しましょう

冷いしわすの風にさらされ  
不幸な生活を送っている人  
たちがいます。  
年末年始を少しでも明るく  
過ごすよう、この運動に協  
力しましょう。

ルケースを通じて強く打ち出した。それは、県内三カ所「城北、熊飽、城南」に植え付けから収穫まで一貫した大型機械による集約モデル農場を建設指導したのである。一農場あたりのほ場約五〇ヘクタール、従来一戸あたりの平均耕作面積を一ヘクタールとして、五〇戸を集約して一農場とした。このモデル農場のことを「あすなろう農場」と呼ぶことにする。

このあすなろう農場、作業はもちろん、収支決算まで完全な協業体である。組合員の出資は、従来までの耕作反別に比例して出資した。たとえば、一ヘクタール農家の出資は、農地一ヘクタール<sup>プラス</sup>総事業運営費(農機具及び作業場、倉庫を含む。)の五〇分の一、つまり二割になる。したがって、利益の配分も、総収入から諸経費を引いた純益の五〇分の一となる。つぎに、あすなろう農場の特筆すべき利点にふれていくことにする。

はじめに農業機械の利用価値について、従来までは一ヘクタール未満の農家も二ヘクタール耕作農家も、農家である以上、耕土作業機械から病害虫防除の器具、収穫乾燥に至る一式の機械類を最小限必要とした。これらには、一見してムダが多いと思われる機械が多過ぎる。この中で、耕土機を例に上げて、具体的に

## 流通指導の研究機関を

熊本市保田窪本町 後藤 純夫 (会社員 31歳)

熊本県が今日、後進県としてのそしりをまぬがれ得ないのは、一つは米の上にあぐらをかいていたからだと言えらる。そしてこのままあぐらをかきつづけるならば、おそらく農業そのものに於いてさえ後進性を帯びなくてはならないだろう。

現行の食糧管理制度は、もはや限界に達している。米の需給は極端な過剩現象を呈しているにもかかわらず、生産者米価は急騰の一途をたどっている。四十二年の生産者米価は輸入米価格の二倍以上にもなっている。今日の農民所得の水準は経済原則からすれば甚だ矛盾した政策米価によって支えられているのである。

米の即時完全自由化は不可能だとしても、政策的米価は今年あたりを境に次第にその色彩を薄めて行かざるを得ないであろう。もしこのまま現行の食糧制度を持続させるならば、それはかえって農業自体の体質を弱め、近代化への芽を摘みとってしまう羽目にもなりかねない。

穀物の需給が緩和されて来れば、必然的に高蛋白質食品、高ビタミン食品の需要が増大して来るだろう。それは米作第一主義であった農業から脱却し、畜産、果樹園芸を織り込んだ多角的な、しかも大型の農業への脱皮をせまってくるであろう。

な利用価値判断の用に供すれば、耕土機一台で水田一ヘクタールあたりの耕土日数が年間僅か七日で済む。農業改良普及所の指導によると一馬力の耕土能力が一ヘクタールであるから八〜一〇馬力の出力を所有しておれば、八分の一〜一〇分の一の利用値しかない機械を農家は三〇万近くの金をやりくりして所有していることになり、まさにロスだらけの農業機械ということになる。耕土機だけに限らずその他の農機具類も大同小異であろう。年間を通じて十分活用されてこそ機械の力が発揮できるといふのに、どこの世界に三〇万もの札束を倉庫に遊ばせておく事業家がいるものか。こういう無能な零細農家であってみれば、いきおい人体に労働の負担がかかる。種子播から収納まで。そしてできあがった生産物は一五〇キロあたり、二万円もの国際的に比類をみない高米価となって消費者にはね返ってくる。世界は一つの掛声で貿易自由化が進んで行く今日、保護政策に甘んじて、真の農業の発展が考えられるものではないだろう。

我等があすなろう農場では、すべての作業を、大型機械を有効に利用しているため、人体労働の負担も著しく軽減されたほか、生産に用いる労働日数も従来の三分の一に減少した。又労働形態も専従組織としたので残り三分の二の余剰人員は、年間を通じて副業に精を傾けられる結果となり、生産物のコストダウンに明るい材料の一つになったことも見のがせない。

つぎに、普通作だけを扱うあすなろう農場であれば、他の仕事、蔬菜、畜産等は個人経営となる。

今日企業間では経営戦略と云う言葉が使われているが、これは時流に乗る作戦であると云われる。ただ物をつくればよい、増産すればもうかる時代は既に去った。

これから農業が多角化するにつれ、県を一つの企業的存在として仮定するならば、やはり経営戦略と呼ぶべきものを打ち出さねばならない。例えば果樹園芸、畜産のいわゆる生鮮食品について、その生産段階に於いては、農業試験場、果樹試験場等の研究機関があるが、流通段階に於いても同様研究機関を設置するとうようなことである。

最近、野菜、果物、肉等生鮮食品のほとんどが包装されている。流通革命による巨大小売の寡占化は着々と進行しており、そこでは売り安く買いやすい単位にまとめポリエチレン袋に詰められている。そして生産地や工場であらかじめ包んで出荷する事前包装が次第に増えている。果物の場合はボールの化粧箱に詰めて贈答用や、家庭での消費に箱ごと買うという傾向も目立ってきている。更にコールドチェーンの普及がある。これは事前包装を一層推し進める役割を果たしている。冷凍し、事前包装した生鮮食品は鮮度が落ちず痛みも少なく衛生的である。しかもそれは輸送コストを下げ